佳作

ひいおばあちゃんのこと

東京都　大田区立高畑小学校二年　平山　翼颯

　ぼくの九十二才のひいおばあちゃんは夏休みのさいごに天国へ行きました。なん年か前に心ぞうがわるくなってたおれて、びょういんでしゅじゅつをしたらよくなりました。だけどお家にかえれないからしせつというところで生かつすることになりました。ぼくは毎週あそびに行っておやつを食べたり、おこづかいをもらったりしていたりしていたので、すこしさびしくなりました。だけどお母さんが、
「会いたい時は会いに行けるし、お話もできるよ。」
と言ってくれました。それからみんなで会いに行って、耳がきこえづらくなっているひいおばあちゃんのために大きなメガホンで話しました。ひいおばあちゃんはうれしそうでした。
　今年の夏休みにひいおばあちゃんがまた入いんすることになりました。こんどはすごくぐあいがわるくてしんぱいになりました。
　ぼくが会いに行くとひいおばあちゃんは、
「早くよくなって、またおこづかいあげるからね。
　おばあちゃんがんばってごはんたべるね。」
と言いました。ぼくは「ごはんいっぱいたべて元気になってね」と思いました。
　それから毎週みんなでおみまいに行きました。だんだん元気がなくなってきて、人工こきゅうきをつけていたけれども、ぼくのことをだきしめてくれたりしました。ぼくの手をひっぱってしんぞうがあるところをさわらせてくれました。しんぞうの音ってこういう音なんだと分かりました。何回かおみまいに行っているうちに、ひいおばあちゃんはよびかけてもあまり聞こえていないみたいでうごかなくなりました。だけどしんぞうにぼくの手をおくとうごいているのが分かりました。
「また来るからね。」
といってさよならをしました。
　ある朝おきるとお母さんが
「ひいおばあちゃんがなくなったよ。」
といいました。それからひいおばあちゃんに会いに行きました。
　こんどはびょういんのベッドではなく、ひつぎという木のはこの中にいました。もうよんでもうごかないし、つめたくなっていました。みんなできれいな花をたくさん入れてあげました。お母さんは
「おばあちゃん、ありがとう。」
と言ってないていました。ぼくは
「なんでありがとうなの。」
と聞きました。するとお母さんは
「ひいおばあちゃんがいたから、おじいちゃんがいて、おじいちゃんがいるからお母さんがいて、だからつばさがいるんだよ。だからつばさが生まれて大きくなってうれしいから、ありがとうなんだよ。」
と言っていました。そして
「つばさもいのちをつなぐからいつもがんばるんだよ。」
といいました。
「そうなんだ。だからいつもいろいろな人がぼくにがんばれというんだな。」
とへんじをしました。ちょっとうれしくなりました。
　ひいおばあちゃん、おうえんしていてね。ぼくは毎日がんばっているよ。